

ポスト・コロナショックの 学校における「希望」としての キャリア・シチズンシップ教育

神奈川県立瀬谷西高等学校
教諭

黒崎洋介

コロナショック下の学校現場

「うちの親が新型コロナウイルスの關係で失業してしまったので、高校では放課後に部活動ではなくアルバイトしようと思うんです。高校卒業後は、就職を考えています」

高校に入学して最初の個人面談で、クラスの生徒がこう高校生活の展望を語る。未来への「希望」に溢れているはずの新入生が、である。

この原稿を書いている2020年7月現在、多くは高校で1学年の学年主任を務めている。入学式は、緊急事態宣言が7都府県に発令された4月7日に、マスク姿の生徒と教員のみ、極めて簡素な形で行われた。これ以降、約2カ月にわたり臨時休校が続き、教師と生徒／生徒と生徒のつながりは断ち

切られ、生徒の学びには格差が生じることとなった。そして、ようやく6月から段階的に学校が再開したところである。

この間、着実に進行しているコロナショックに伴う不況は、経済を大きく疲弊させ、教育・仕事・家族というそれぞれの社会領域とその結びつきをより深く破壊している。失業や労働条件の悪化は、家庭から金銭的・時間的・精神的な余裕を失わせ、教育費や教育意欲などの家庭間格差を拡大させる。この帰結として、社会的にも経済的にも弱い立場に置かれている生徒にしか寄せが生じている。

冒頭の生徒は、中学校ではテニス部に所属していたという。コロナショックがなければ、違う高校生活の展望も描けたのではないか。コロナショック

は、生徒の社会的孤立や学力格差をもたらしだけでなく、未来への「希望」をも生徒から奪い取ろうとしている。

「希望」なき社会に「希望」の教育を

「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない」

村上龍は、2000年に刊行した小説『希望の国のエクソダス』の中で、閉塞感漂う日本社会への抵抗として80万人の規模で集団不登校を起こす中学生の代表にこう語らせた。彼は「希望だけがない」という国で、希望だけしかなかった頃とほとんど変わらない教育を受けているという事実をどう考えればいいのか」と続ける。

この台詞が示唆するように、コロナショックによる未来への「希望」の喪

失は、生徒に学校での「学びの意味」を見失わせ、学びそのものからエクソダス（脱出）させることとなる。その一方で、逆説的ではあるが、生徒が学校での「学びの意味」を見失い、学びを放棄することは、より一層の未来への「希望」を喪失させることにつながる。ポスト・コロナショックにおける学校の責務は、学校での「学びの意味」を再建し、生徒に未来への「希望」を取り戻すことにある。

しかし、これまで学校での「学びの意味」は存立危機事態にあったといっても過言ではない。生徒からの「なんで勉強しないといけないの?」という学校での「学びの意味」への問いに対して、多くは「教師は、受験や進学に不利になる」という脅しの呪文を唱え、ある時は、有無を言わせない一斉授業やゼロ・トレランス的な生活指導によって、そのアカウンタビリティ（説明責任）を果たしたつもりになっていた。その結果、さらに生徒は学校での「学びの意味」を見失い、学びから逃げ出すことになるかも知れず、である。コロナショックは、こうした学校での「学びの意味」に追い打ちをかけ、ついにはシニシズム（冷笑主義）とニヒリズム（虚無主義）をもたらしている。

こうした事態に際して、多くは教師には何ができるであろうか。教師のレゾン・デートル（存在理由）は、教科の教員免許状が証明するように、授業にこそある。生徒が学校での「学びの

意味」を実感できる授業づくりを進めることで、学びの専門家としてのレスポンスビリティ（応答責任）を果たす。これこそ、ほくたち教師が、コロナショックによる未来への「希望」の喪失に抗う唯一の術なのではないだろうか。

学びの「職業的意義」と「市民的意義」

それでは、学校での「学びの意味」を生徒が実感できる授業づくりとは、具体的にどのようなものであろうか。一般に、「学びの意味」は、学びに面白さを感じる「即目的意義」、将来働く上で役立つと感じる「職業的意義」、将来市民として生活する上で役立つと感じる「市民的意義」という3種類に分類できる¹⁾。この分類の区分は相対的なものであり、一つの授業内容が3種類すべてを備えている場合もあり得るし、いずれかに特化している場合もある。しかし、これまでの学校では、現在志向の「即目的意義」を重視する反面、未来志向の「職業的意義」と「市民的意義」を軽視する傾向があった。例えば、「職業的意義」については、働く上で誰もが身につけておくべきワークルールに関する教育や個々の職業分野に即した知識や技能を育む教育は、未だに十分とは言えない。一方、「市民的意義」については、主権者として求められる政治的教養を育む教育は、2015年の選挙権年齢引き下げまで事実上の凍結状態にあった。この結果、

「職業的意義」と「市民的意義」が実感できない学びの場において、生徒は「なんで勉強しないといけないの?」と問うのである。

ポスト・コロナショックの学校では、学校での学びがキャリア形成やよりよい社会づくりとどのようにつながっているかを明示することを通して、「職業的意義」と「市民的意義」を実感することのできる授業づくりが求められる。ここで求められる授業づくりの視点こそ、キャリア教育とシチズンシップ教育である。キャリア教育は「職業的意義」をもたらす、シチズンシップ教育は「市民的意義」をもたらす。そして、ワークキャリアに傾斜するのはなくライフキャリアにも目配りするためにも、キャリア教育とシチズンシップ教育は統一的に扱われることが望ましい。このことは、スーパードの「ライフキャリア・レインボー」の考え方からも理解できよう。

このように、キャリア・シチズンシップ教育という視点から授業づくりを見直すことにより、生徒は学校での「学びの意味」を実感し、学びを通して未来への「希望」を取り戻す。学校は、大人や社会への移行支援の場として再定義されるのである。

「希望」としてのキャリア・シチズンシップ教育

や方法を工夫して、学びの過程や成果を評価する、いわゆる「指導と評価の一体化」を図ることが重要である。そこで、キャリア・シチズンシップ教育という視点から授業づくりを見直す際の留意点について、学習指導と学習評価という点から考える。

学習指導については、授業内容を「職業的意義」と「市民的意義」を実感することのできるオーセンティック（真正）なものとする必要がある。オーセンティックな学習とは、具体的な文脈や状況を豊かに含みこんだ本物の社会的実践への参画としてデザインされた学びであり、具体的な文脈や状況に即して学ぶことを通して、未来に生きて働く資質・能力を育成することを目指す²⁾。ここでの教師の役割は、教科書をわかりやすく教えることではなく、生徒が本物の社会的実践に参画することのできる学びの舞台を用意することにある。例えば、公民科において、ワークルールを学ぶ際に労働条件通知書を実際に作成する授業や、選挙制度を学ぶ際に模擬投票を行う授業などが考えられる。また、英語科においては、英字新聞を読むことを通して英文法を学ぶ授業などが考えられよう。

学習評価については、授業に対する「主体的に学習に取り組む態度」の評価について工夫することが必要である。しばしば、授業は生徒の仕事に例えられる。イリイチが「シャドウ・ワーク」と表現したように、授業という生徒の仕事は無報酬という特徴があるに

せよ、授業における「主体的に学習に取り組む態度」は、この先のワークキャリアやライフキャリアで出会う課題に取り組み姿勢にも引き継がれるだろう。評価に際しては、学びに対して粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学びを調整しようとする意思的な側面に注目し、将来質の高い課題解決を成し遂げられるよう適切に育成することが望まれる。

禍福は糾える縄のごとし

糾える縄のごとし、コロナショックという「禍」は、学校での「学びの意味」を再建し、生徒の未来への「希望」を取り戻すという「福」へと転じる契機にもなる。カミュは、小説『ペスト』の中で、「絶望に慣れることは絶望そのものよりもさらに悪い」と述べる。ポスト・コロナショックの学校において、ほくたち教師ができることは、授業を通して絶望に抗うことである。その際、キャリア・シチズンシップ教育という授業づくりの視点は、未来への「希望」へと至る水先案内を果たすだろう。

【引用文献】

- 1) 本田由紀「若者と仕事―「学校経由の就職」を超えて」、東京大学出版会、2005年
- 2) 児美川孝一郎「まず教育論から変えよう」太田次郎社エディタス、2015年
- 3) 奈須正裕「資質・能力」と学びのメカニズム」、東洋館出版社、2017年